

なつて飛散してしまいました。

「重大戦局」となったことを、体験が脳裏をかすめました。玉砕を覚悟、そうした死を思う心の中にも生への執着が、生きるための手段と模索が始まりました。よろめく心の動きの中で、目前で、そして前後で、撃たれた戦友の形相が浮かぶ。野草を束ね、屍のない土饅頭の上に差し、両手を合わせて無心で折り弔うのです。

そうすることによって、この異常な環境の中で、平常な気持ちになり心に幾分かの安らぎを得たように思いました。それも束の間「ピューン」と耳元で鳴る流れ弾の音に思わず首をすくめる。また死と生への様々な心の葛藤が起さるのです。

「もしかしたら俺もここで……」と思う反面、「きつと生きて帰る……」と弾が少なくなつた小銃を握りしめました。戦地とは「死にたくなかつたら相手を殺せ、怪しいと思つたら殺せ、殺しそびれた方が死ぬ」ギリギリのそんな殺し合いの場に放り込まれた兵隊は、きつと一過性の狂人にならざるを得ないのではないか。

このような状況の明け暮れに、生と死の境で戦い続けたことは次の機会にお話しをしたいと思います。生きて帰れた我々は、今日こうしているが、戦没者とそのご遺族に思いをいたすとき、万感胸に迫るものがあります。

## 第二師団歩兵第二十九連隊

### 命令受領者として

福島県 内海 好八

大正八年三月九日、現住所の耶麻郡北塩原村大字北山字土合五四九八の農家に八番目の末っ子として生まれました（三人死亡）。

昭和十四年徴集兵とし第一補充兵でしたが、現役の人より早く教育召集を受け、新潟県新発田の歩兵第十六連隊第四中隊に入隊しました。教育期間は大変厳しかったのですが、三カ月で召集解除となりましたが、半分の方は満州の関東軍へ転属しました。

私は幸か不幸か、一期の検閲を受け、家に帰り農業をしていましたが、昭和十九年まで召集がなく、十九年五月まで私一人だけが残ってしまいました。村には男がいなくなつたので、何で私に召集令状が来ないのかと思ひました。ようやく会津若松の第二十九連隊に召集されましたが、ほとんどが昭和十四、五年徴集者。私一人が一つ星、他は既教育者で兵長や下士官が多かつたのです。

私は、既教育兵の中でどうなるかと思ひつつ郡山へ集合しましたら、第二十九連隊へは歩兵第四連隊、十六連隊の第二師団の歩兵が集まっていました。しかし、第二十九連隊はガダルカナル島で玉碎し、残つた兵隊は比島へ集結していました。

比島（フィリピン）で再編制された連隊は、ビルマの援蔭ルートの作戦に向かつていました。ラングーンから雲南省―重慶までの公路です。今思えばインパール作戦に呼応しての作戦です。

我々は軍装して郡山から門司へ向かいました。私は九九式の軽機関銃の射手で、輸送指揮官は角田少尉で

した。輸送船の蚕棚のような船倉に入つて門司で待機していましたが、十九年の五月ごろですから、近海には潜水艦が出没して出港することができません。それまで船倉での生活です。狭い所で不安な毎日でしたが、ようやく仏領印度支那のサイゴンに上陸できました。

一路雲南へ追及して師団司令部に到着しましたが、師団主力はラシオ攻撃命令が出ていて我々の到着を待っていました。しかし我々が遅れたので部隊は先に出發してました。そのため一カ月間、部隊の帰るのを待つていました。一等兵は私一人だったので、歩兵第十六連隊から一等兵が二十人くらい入つたので仲間が二十一人になり第一中隊に配属されました。

そこはビルマのペンマナという所でした。昭和十九年八月ころになつて、ラシオから部隊全部が下つて来て、我々の部隊はペンマナで再編制されました。私は歩兵第二十九連隊第一中隊第一小隊に配属され、二日目の夜准尉に呼ばれ、中隊指揮班に回れという、指揮班には兵隊は三人だけで他は下士官と兵長だけでした。任務は将校当番、伝令でした。師団司令部から連隊

本部―第一中隊指揮班から各小隊へと伝令が専門です。軽機関銃射手だったのに軽機は一回も使いませんでした。

ビルマ作戦から撤退した部隊は、明号作戦に参加するため急遽サイゴンまで下がり、南部仏印のサイゴン付近で戦闘をしました。中隊長は宮大尉、その後、福島県相馬の西内正中尉でした。仏印のフランス人部隊に対し野砲を配備攻撃しましたら我が中隊指揮班が撃たれました。中隊長や軍曹のいる所で、私も顔スレスレに撃たれ、その時はやられたと思いました。

撃った敵兵を捕らえましたが、手を上げ降参したので「撃つな」と言われました。部隊は残兵を追って一週間戦闘をした後、サイゴンに戻って間もなく終戦となりました。

「南方軍はやられていない。南方軍は降伏しないで戦争を続ける」と、寺内南方総軍司令官は言った。終戦になってからも武装解除されず、グラットという所に南方総軍司令部がありました。寺内元帥は地下三階にいました。その上に将校室や会議室などがあったの

で、爆撃があっても大丈夫です。元帥は軍服も着ておらず、パナマ帽を年中被っていました。

戦地へ来ても私は一つ星の一等兵でしたから、「ハイハイ」と言っていました。同じ徴集兵は下士官や兵長だから、私は一生懸命に勤務して兵長までになりました。同徴集兵と同階級で帰りたいと思つたのですが、それが認められるまでには随分苦労しました。戦後の今日でも、戦友会をやっていますが、今は准尉が会長をやっています。

戦友会のたびに、戦闘中のことを思い出して話し合いますが、もう一度勤務の状態など話してみます。

南方総軍の命令受領者は曹長で、伝令は伍長又は古参兵長なのに、第一中隊第一小隊から出せということ、私は上等兵になったばかりなのに伝令をやりました。南方総軍から第二師団司令部まで、命令を持ってくる重要な役目なのです。

命令受領のラップが鳴ったら私が行かざるを得ませんでした。一生懸命書くのですが、初めの方だけは何とか書けるのですが、これが兵隊となって一番困った

ことでした。その後には兵長となり、やっと慣れて書けるようになりました。こんな重要な任務ですが、先に申しましたように、南方総軍―第二師団(勇一三三九)―第二十九連隊(勇一三〇三部隊)、我が連隊では階級に関係なく何でも第一中隊から出されました。

明号作戦(末尾参照)が始まる前、サイゴンやジャワなどは南方の天国と言われていましたが、ビルマ北部雲南での戦闘は大変でした。私たちは船が遅れたため、ビルマ作戦に行かず死なずに済んだと言えますよう。

私が入隊したとき、軽機関銃手だということで、私たちは私の命は無いだろうと思っていたらしい。手紙は一度か二度きましたが、昭和十九年七月以降は輸送船が途中でやられてから届きませんでした。

サイゴンに上陸したとき、海軍の兵隊が非常に多いので、「なぜか」と聞いたら、彼らは「乗る艦、船が無い」と言う。これでは負けるぞとひそかに思いました。

明号作戦では何名かの戦友が戦没しました。仏軍は、

「日本軍の総攻撃がある」とのスパイ情報で、逃げてしまいました。現地軍は普段は百姓をやっていて、ニッパ椰子、茅の小屋にいるが、いざ日本軍が攻撃すると、隠しておいた小銃で抵抗します。だから特に日本人が一人のとき、伝令や巡察のときにやられます。隊伍を組んでいるときは襲われたいのです。彼らは集団で銃二十挺ぐらいを小屋に隠しているのです。現地人の民兵で、フランス軍の中にいました。

―終戦後の状況、特に独立軍との関係はどうでしたか―

ダラットで武装解除されずに警備していました(私は独立軍の現地人からの攻撃を守るため日本軍を使っていた)、現地人の兵らは、「フランスの属国にならない」といつて仏と戦争をやっていました。日本の逃亡部隊(降伏しない日本軍人)の兵器をもらって独立しようとしていました。現地軍は連合軍の言うことを聞かない。日本軍は内心印度支那を独立させたいものですから、日本軍の兵器や弾丸を随分彼らにやりました。

連合軍は、日本軍に独立軍を攻撃させようとするけれど、日本軍は彼らを撃たずに空へ向かって撃つ、そのため連合軍は一個中隊に二、三人の監視兵をつけるようになりました。連合軍は現地独立軍兵士を捕える、彼らを竹の棒で打って、半殺しになるまで打つ。

このため戦後、連合軍兵士が現地人に殺されました。

ダラットには、昭和二十年九月から、二十一年五月までいました。兵器を持って、連合軍を守る命令を受けました。戦争に負けたのだから止むを得なかったのです。先に申したように日本軍を督戦する連合軍兵士が隊に二、三名いました。

現地軍の軍人たちは、日本軍人に独立させてくれと言ひ、日本軍も陰に陽に助けていましたが、その後、連合軍に命ぜられ独立軍と戦うようになったので「我々の独立を助けた日本軍が、今度はなぜ我々を撃つのか」と言つて、現地人から泣かれました。このようなとき、「敗戦の悲しみ、現地軍がかわいそうだった」とそのつらさを今でも忘れられません。

降伏すれば連合軍の言うことを守らねばならない。

連合軍の命令は絶対であり、戦後の我が軍の配置も、使役も、便所掃除も、街の片付けもやらされました。

仏人の護衛・警備もやらされました。日本人として、さらにつらかったことは、臨時憲兵に出され、日本人戦犯の取調べをさせられたことであります。日本軍憲兵は、サイゴンに着いたとき、分遣隊全部で五、六名いましたが、それらの人々は連合軍憲兵に手錠をかけられ、内地の方を向いて礼をして、どこかへ連れていかれました。

抑留期間中は、日本軍の食料を日本軍の輜重隊が自動車で運んでくれたので余り不自由はしませんでした。仏印では、連合軍より抑留日本軍の方が多く、連合軍も日本軍を極端には虐待できなかったでしょう。

― 帰国はいつでしたか ―

昭和二十一年五月、サイゴンから我々は貨物船で二十日間ぐらいかかって鹿児島へ上陸しました。他の兵隊は連合軍のリバティー船で、三日間で大竹へ着いたといひます。

家に着くと、友人も帰っていて私が一番遅かったの

です。その後現在まで農業をやっていますが、最後の召集兵のため同年徴集者に負けまいとして頑張り、苦勞を重ねながらも無事帰れました。しかし若し現役兵として勤務していたら、あるいはガダルカナルか、ビルマで戦死していたかもしれません。人生も運、軍隊も運隊といいますが、努力することが大切と、軍隊時代を回顧するものです。

## 第二師団、歩兵第二十九連隊の明号作戦について 解説

執筆者が召集、ビルマで勤務した第二師団、歩兵第二十九連隊は通称号勇一三〇三部隊であり、明治二十九年会津若松で編制された部隊である。第二師団はガダルカナル戦の主力部隊として投入され、昭和十八年二月玉碎状態を経て撤兵、フィリピンで戦力を回復、続いてビルマのインパール作戦後期、敗勢のビルマ北部で作戦し、さらに多大の犠牲を被ったのである。

内海氏が一路雲南に追及し編制された所はビルマのピンマナであるが、そこはシッタタン川上流、トングー

北方約百キロ、マングレー南方約二八〇キロの地点である。しかし、そのピンマナは昭和十九年四月十九日、英機甲部隊により攻撃され、郊外の飛行場は占領され、修復した滑走路を使つて英軍は部隊及び軍需品を続々と空輸していたのである。

次にビルマ作戦から撤退した部隊は仏領印度支那に入り明号作戦に参加した。仏印は今のベトナムで、タイとカンボジアで国境を接し、コーチシナはサイゴンを中心とした南仏印である。タイは日本とは友好的關係を続けていたが、インドシナは仏領であり、フランスはドイツの占領下であり、ビーシー政府に変わったが、昭和十九年八月連合軍はパリに侵入、パリ陥落と同時にド・ゴール將軍がフランス臨時政府の主席に就任した。

当然インドシナ情勢は激変していく。日本軍に対する態度も協力度も変化していった。

しかし、インドシナの国内では、昭和二十年三月、ベトナム帝国独立宣言。カンボジア王国独立宣言、四月ラオス独立宣言など、フランス支配を脱するという

変化をもたらした。このような状態の醸成される中、計画実施されたのが「明号作戦」である。

第二師団は二月中旬から下旬にわたり逐次インドシナに到着し、逐次到着する部隊を配置して武力処理を準備した。

師団司令部 プノンペン

歩兵第二十九連隊（長 三宅大佐）

第一、第二大隊、速射砲中隊二分の一、

砲兵、工兵、野戦病院その他配属部隊

ストントレン、クラチエバクセ

歩兵第二十九連隊速射中隊主力 プノンペン

百二十八隊（長 柴田大佐） プノンペン

歩兵第二十九連隊第二大隊（長 原田少佐）

大湖南側地区

搜索第二連隊（長 原大佐） プノンペン北方地区

野砲兵第二連隊（長 石崎大佐） 第一・第二大隊

欠 プノンペン北西地区

工兵第二連隊（長 高瀬大佐） 主力プノンペン

輜重兵第二連隊（長 山口少佐）

プノンペン南方地区

第四師団歩兵第八連隊第一大隊（長 唐沢少佐）

指揮下

統治の準備

土橋軍司令官は「無為の為」を統治の方針とし、その時の事情に即して臨機応変に処理することを意図していたが、武力処理決行前に取り敢えず次の処置をした。

一、決行時に間に合うようにアンナン、カンボジア、ルアンプラバンの主権者に連絡者派遣。

二、次のような骨子の布告を準備した。

一般布告

日本は止むを得ず武力を発動し、仏印軍の武装を解除、総督以下の首脳者を監禁保護して、統治機構が停つたので日本軍司令官が代わって行政に当たるが、従来どおりなんらの変化も加えず十分に保護するから、各々その処に安んじて動揺しないこと、但し治安を乱す者があれば、嚴重に処罰

する。

### 特別布告

一つは現地人に対し、特にフランス人の生命財産に危害を加える者は嚴罰に処する旨を伝えるもの。他はフランス人に対し、フランス人の生命財産は保護するから安心して業に励むようにというもの。

土橋司令官は、仏印總督大使に、統治の補佐役にしようと考え、大使は軍の最高顧問とし処理後約一カ月間補佐してもらいたい。他の全職員はそのまま軍において働いてもらいたいと大使府に申し入れたが、大使府はこれを拒絶した。

南部仏印処理 カンボジア 三月九日

武力発動の命と共に独立歩兵四百二十八大隊は主力をもってマルタン兵營および仏印軍旅團司令部を攻撃、大きな抵抗なく占領。搜索第二連隊はコンポンチャナの仏軍兵營を、歩兵第二十九連隊の主力はストントレン、クラチエを、歩兵第八連隊第二大隊は協力して、

パクセ攻撃、それぞれ十日午後には仏印軍の武装解除を終わった。歩兵第二十九連隊第二大隊はプルサト、アクロメア、コンポークナンなど大湖南側の処理を行った。

第二師団は仏印軍の武力処理に際して、カンボジアのシアヌーク国王を保護すべき命令を受けていた。王宮内の寺院に僧侶に扮して避難していた国王に、木下参謀長を派遣し、「本作戦は仏軍の武装解除を目的とするもので、貴国に対しては他意なきをもって安心して国政を執られたい」との第三十八軍司令官の布告を伝達させた。

これによりカンボジア王シアヌーク・ノロドムは三月十三日独立を宣言した。

### 第二・第三期作戦経過概要

#### 第二師団地区

第二師団は第一期作戦に引き続き周辺の掃討を行った。搜索第二連隊はコンポンチャム付近から遁走の敵を求め北部国境へ。独歩第四百二十八大隊の一部をも



つて西方に遁走した敵をエレファン山脈の北西に追撃。歩兵第二十九連隊一部はストントレンから北上、キナ、ハットサイクの仏印軍及び保安隊を処理しバクセに前進、更にバクセ北方パクソン及びサラパンに進出、同地保安隊を処理。三月二十二日～二十六日にわたり、歩兵第二十九連隊主力をもってポロバン高原一帯を討伐。

第三大隊はスヌール、ローランド方面を処理。四月二十六日、連隊主力をもって北方第二十一師団との隣接地区の討伐を行い、五月二日終了。

五月初旬仏印武力処理一段落により、第二師団は、コーチシナ、カンボジア、南部アンナンの治安及び次期作戦準備を命ぜられた。

第二師団長は歩兵第二十九連隊（一大欠）をもってビエンホア以東の地区、同第二大隊をブノンペンに位置し大湖以南の地区の警備を担任させ、師団司令部は五月サイゴンに移動した。

昭和二十年五月十五日、第三十八軍は南方軍から新たに「仏印の治安を維持してこれを安定確保し、敵の

来攻に当って所在にこれを撃破して、仏印の要地を保持し敵の攻勢意志を破砕し、且つハノイ、サイゴンはこれを確保しまた米、地上連絡を遮断」すべきを命ぜられた。

### 第三 部 署

十一 南部防衛隊（第二師団基幹）は左のごとく準備す。

1. サイゴン北方、ロクニン、クラチエ付近に堅固なる主抵抗拠点を構成、これを支撐とする鞏固なる独力戦闘遂行を準備する

2. 海岸付近はこれを監視するにとどめ、上陸する敵に対しては所在の遊撃拠点により活発なる遊撃戦を展開、その戦力漸耗に努む。

3. サイゴンは有力なる一部を以てこれを保持するに努む。

4. 泰国方面からする敵の突進を警戒す。

### 第二師団の戦力充実

第二師団諸隊は明号作戦終了後、逐次ビルマから反転して来たが、戦力の消耗が大きく直ちに使用することができなかつた。軍はまず第二師団の戦力充実を急務とし、航空地区部隊などの整理に伴う剰余兵力約二万名を総軍から受領して、うち六、〇〇〇名を第二師団に充当、その人員の充実を図つた。即ち、二個大隊の一連隊、三個大隊の一連隊を編制、警備に当たらせ、七月にはさらに補充員を加え、師団大改編を行つた。

## 南洋の孤島

### クサイエ島戦記

石川県 山城 重次郎

大正九年八月二十五日、石川県羽咋郡北荘村字宝達で生まれ、家業は林業、炭焼きです。兄三人の四人兄弟でしたが、両親は死にました。学校を卒業、金沢へ出て印刷屋に住み込み修業していました。昭和十五年徴兵検査では第二乙でしたが、印刷屋にいるとき、教

育召集を受け、歩兵第七連隊に入隊、三カ月で解除になりました。その時、教官は「お前たちが家に帰るより先に赤紙がきているかわからんぞ」と言われました。その頃は米栖大使が米国で交渉中でした。昭和十六年十一月金沢へ帰り、印刷屋に戻っていました。

開戦直前の召集解除ですから、再召集がいつくるかと思つている一年間に平和産業は配給も少なくなり、苦しくなりました。そのため、友人の紹介で川崎市今井南町（東横線の工業都市駅近く）の富士通信の下請けの軍需工場に勤めました。通信機の部品作りを丸一年しているうち、十八年八月末、召集の赤紙がきました。

昭和十八年九月三日、金沢の歩兵第七連隊の留守部隊に入隊、南方行きのため、その日のうちに再編制されました。出発は九月十日、金沢―宇品、一万トン級という「栗田丸（仮装巡洋艦）」に弾薬、兵器を積み込み、宇品港から南洋カロリン諸島ボナベ島へ向け出航しました。豊後水道では多くの人たちが船酔いしましたが私は大丈夫でした。食事は海軍の乾パンが支給